

催眠の認知科学的研究と現象学

谷内 洋介¹・漆原正貴¹

¹ 東京大学総合文化研究科

本発表は、フッサール以来の学問的伝統としての現象学と、催眠の認知科学研究が相互交流することにより、双方の研究目的にとって有益なアイデアを取り出し合うことを目的とする一つの試みである。①現象学の立場から出来る催眠の認知科学的研究への提言と、②催眠現象と催眠の認知科学理論が現象学の議論に及ぼす理論的な影響を探る。

催眠は、M. エリクソンが創始した現代的な催眠の潮流以降、認知科学研究の中で研究されており、現在でも催眠のメカニズム、神経基盤、臨床における応用の可能性等が探られている。催眠は臨床や研究の場のみならず、一般的な単語としても知れ渡っているが、未だに誤解は多く付きまとっている。そうした誤解の背景として、未だ経験科学は「催眠状態」の十分な定義を行えていない、という事実がある。脳機能計測の発展に従って催眠に関連する脳部位の特定が進んではいるものの、未だ催眠の神経基盤の全容は明らかになっておらず (Oakley, Halligan 2013)、現状の方法論に於いて明らかになる保証は無い。

催眠のかかりやすさには個人差がある。こうした催眠へのかかりやすさを「催眠感受性」や「被暗示性」と呼び、これを測定するための尺度も多く存在する (高石&大谷, 2012)。催眠感受性を測定するための手法としては、催眠誘導と複数の催眠暗示によって構成された文章を読み上げた後に、質問紙を用いて被験者自身にどの種類の暗示に反応したかを答えてもらう方法が一般的である。被験者によってどの暗示に反応するかは様々であり、体の一部を動かさなくなる者もいれば、存在するはずのボールが見えなくなる者もいる。

昨今、脳機能計測の発展に従って催眠に関連する脳部位の特定が進んではいるものの、未だ催眠の神経基盤の全容は明らかになっていない。こうした現状の背景には、様々な方法論的・社会的制約や概念的な問題がある。そのひとつが、催眠状態を統制することの難しさである。同じ暗示文を用いて催眠術をかけたからと言って、被験者は毎回同様の反応をするわけではない。更には、表面的には同一の反応に見えても、その内実が異なっているという例は催眠に多く見ることができる。例えば、「自分の名前を忘れてしまう」という暗示に対する被験者の心的状態として、「どのように想起を試みても名前が出てこない」から「名前の文字も発音も想起できるが、発声ができない」まで、様々な状態が考えられる。しかし実際観察される現象としては、どれも「名前を尋ねても、被験者はそれを喋ることができない」という単一のことがらになってしまう。この例に限らず、暗示文の統制を行っても現象レベルの統制を行うことが困難なことは催眠研究につきまとう課題である。

本発表では、まず現象学を統合失調症理解に応用した研究を参考にすることで、以上のような催眠の認知科学的研究の現状に対するヒントを探りたい。そのような実例として、Parnas や Sass らによる現象学的な統合失調症研究を取り上げる。本発表は彼らの採用する「現象学的」な半構造化面接による研究スタイルに着目する。Parnas や Sass らは現象学的な議論を基礎に、統合失調症の「自己の障害」説を提唱してきた。これは、統合失調症の妄想などの様々な症状は、自己との関連で統一的に理解することが出来るという理論である。これは現象学者 Zahavi のいう「最小限の自己」の概念を基礎にしている。自己の障害説を基礎とした精神医学的研究では、EASE という指標を用いた半構造化面接によって自己の障害の度合いを数値化する。この質問紙は、現象学的な統合失調症理解を背景とした詳細な項目を含んだ質問紙である。

このような研究方法は、一般の認知科学研究とは異なるアプローチを可能とする。従来の認知科学的研究に於いては、催眠状態などにおける被験者の心の有り様は、限られた言語的・行動的データから推測し作られたモデルを用いて捉えられてきた。観察可能なデータと、その背後にある因果的基盤はともに事物のような things-like 性質を伴ったものだと考えられている。しかし、EASE のような現象学的な研究方法においては、意識現象はそのような性質を持ったものと同じように扱うことはできないと考えられている(Nordgard, Sass, Parnas 2013)。

通常の認知科学的な発想とは異なる現象学的な研究を催眠現象に応用したとき、催眠現象の異なる側面を明らかに出来る可能性がある。どのような成果が予想されるのか、具体的な催眠研究への応用の仕方とともに探りたい。

しかし、催眠の認知科学研究に現象学を応用する場合、催眠経験の構造を現象学的に明らかにする過程が不可欠である。ここでは、催眠のセッションを起したスクリプトを頼りに、上記の「最小限の自己」の概念を用いつつ、催眠現象を現象学的に明らかにする。ただし、この過程で最小限の自己と言語と関係について改訂する必要が出てくる。

このような現象学側での理論的修正を同時並行で行いつつ、催眠研究の新たなあり方を探る。

Nordgard, J., Sass, L. A., Parnas, J. (2013). The psychiatric interview: validity, structure, and subjectivity. *European Archives of Psychiatry and Clinical Neuroscience*, 263: 353–364.

Oakley, D. A., Halligan, P. W. (2013). Hypnotic suggestion : opportunities for cognitive neuroscience. *Nature Publishing Group*, 14(8), 565–576. doi:10.1038/nrn3538

高石昇 & 大谷彰. (2012). 『現代催眠原論 臨床・理論・検証』金剛出版